

# 近代文学の「学」としての

## —「漱石研究」のこと

鳥井正晴

### 一 『漱石全集』の刊行と、『評伝』の登場

小宮豊隆（明治17年生まれ。東京帝国大学独文科卒業。慶応大学文学部講師。明治44年東北帝国大学法文学部創設に際し、赴任する。独文学者、評論家。）の、『漱石全集』編集と、『夏目漱石』、『漱石の芸術』がある。

#### 1 『漱石全集』の刊行

大正5年（1916年）12月9日、漱石が没する。

○小宮豊隆は、翌6年から、『漱石全集』の編集と校正に没頭し、大正8年に『漱石全集』全十四巻（岩波書店）を完結させる。

\*大正11年7月9日、森 鷗外（60歳）没する。

\*大正15年（1926年）12月25日、天皇崩御（47歳）。『昭和』と改元される。

\*昭和2年7月24日、芥川龍之介（35歳）が、睡眠薬自殺する。

「ぼんやりした不安」を言う。「水洩や鼻の先だけ暮れのこる」

（昭和2年7月）が、辞世の句である。

○また、漱石全集刊行会編集による、第一回配本『漱石全集（虞美人草・坑夫）』第四巻（昭和10年10月）から、第一九回配本『漱石全集（総索引）』第十九巻（昭和12年10月）に完結する、『漱石全集』全十九巻（岩波書店）の編集には、豊隆が中心となつて多大の尽力を注いでいる。右全集は以後、通称『決定版漱石全集』と呼び名される。

本屋の商業上「決定版」と通称されるが、もとより決定版ではない。

荒 正人の「夏目漱石の研究と批評」（『日本近代文学』第23集、昭和51年10月）に、次の諫言がある。

文学の研究での実証も、結局は、絶対に向つて無限に接近する相対的である。本文校訂がどんなに完全なものになつても、決定版というものはない。『聖書』はその最も著しい例である。（中略）ただし、『聖書』だけは違う。

岩波書店刊行の『漱石全集』は、大正6年以来約10年おきに新装

刊行され続け、その回数は10回を超えている。太宰 治の、『もの思ふ葦』（昭和10年）という随筆に、次の溜息がある。

ここには、「鷗外と漱石」といふ題にて、鷗外の作品、なかなか正當に評価せられざるに反し、俗中の俗、夏目漱石の全集、いよいよ華やかなる世情、涙出づるほどくやくしく思ひ、（後 略）

○昭和31年5月、第一回配本の新書版岩波書店『漱石全集』全三十四巻で、それまで伏せられていた「日記」（鏡子夫人に関するもの、皇室に関するもの）が収録される。

○現在最も新しい『漱石全集』は、「自筆原稿から本文を検討する」を建前とし能う限り自筆原稿との照合を閲した、岩波書店の『漱石全集』全二十八巻別巻一卷である。第一回配本「吾輩は猫である」が、平成5（1993）年12月9日刊行である。

この『漱石全集』は、現在通称『新版漱石全集』と呼び名されている。『新版漱石全集』の「全集本文の校訂方針」を企画・編纂した岩波書店の秋山 豊に、著『漱石という生き方』（平成18年5月、株式会社トランスビュー）がある。同著には、「全集本文の校訂方針」が断片的に触れられている。

なお、漱石全集のことは（岩波書店以外のものも含め）、矢口進也著『漱石全集物語』（昭和60年9月、青英舎）に詳しい。

## 2 『伝記』の出現

○小宮豊隆の著『夏目漱石』（昭和13年7月、岩波書店）と同『漱石の芸術』（昭和17年12月、岩波書店）は、漱石伝記の「正

伝」と呼ばれ、今日も漱石研究の原点に位置する基本図書である。この伝記の書き方・文献処理の方法論は、独文学者として小宮の独逸文献学流派に依拠しており硬質な感がある。上記二著は、『決定版漱石全集』の、別巻に位置する。

偉人が出ると、死後その「言行録」が、弟子によって書き起こされるだろう。その最たるものは、イエスにおける「マタイ福音書」「ヨハネ福音書」、あるいは親鸞における「歎異抄」であろう。この「正伝」（の神話）の硬質さを、戦後江藤 淳が剥奪することになるのだが、小宮豊隆の提示した漱石像は、江藤が一刀両断に切り捨てるほどにまやかしてはない。否、傾聴に値すべき処が多く含まれている。

小宮豊隆は、数多い漱石の弟子の中でも最も可愛がられ、本人もそう自認する。以後、小宮は「漱石神社の神主」と言われる。『三四郎』の主人公・小川三四郎のモデルを、小宮豊隆とする説もある。

○森田草平の評伝である『夏目漱石』（昭和17年9月、甲鳥書林）と、同『續夏目漱石』（昭和18年11月、養徳社）は、小宮の「正伝」に対し「外伝」と呼ばれる。

○夏目漱石伝『漱石の思ひ出』（昭和3年11月、改造社）がある。鏡子は漱石の妻であり、松岡 譲は漱石の長女・筆子の夫である。鏡子は、昭和38年4月・85歳で没する。昭和38年は東京オリンピックの前年であり、鏡子は漱石の死後47年生きる。

鏡子の『漱石の思ひ出』は、家庭内の漱石が・夫婦間の漱石が、知れて魅力的な本である。と同時に自分の夫が「狂人」であったこ

とを言う、異様な本でもある。

○荒 正人の「夏目漱石の研究と批評」(「日本近代文学」第23集、昭和51年10月)に、次の告白がある。

わたしの体験でいえば、十代の終りに、夏目漱石『漱石の思ひ出』(改造社版)を読み、夏目漱石の狂気について特別の関心を払うようになった。昭和十年代を通じて、夏目漱石は、狂気なのか正気なのかという問題に心を悩ませた。小宮豊隆は、あれだけの作品を書いたのだから正気だと主張したが、森田草平は、狂気だからこそあれだけの作品を書いたのだと逆説的弁説論を述べた。わたしは、森田草平説に加担した。

○漱石の唯一の自伝小説『道草』に対して、「大岡昇平・三好行雄 対談「漱石の帰結」」(「國文學」、昭和61年3月、学燈社)に、大岡昇平の次の発言がある。

小説は大体自伝から始めるのが普通なんですけど、いまでも同人雑誌小説は七割はそうだそうです。漱石の場合、それが生涯のお仕舞いに出てきたということは、どうも未亡人に対する配慮があったとしか思えない。

○唐木順三の著『夏目漱石』(昭和41年8月、国際日本研究所)に、次の総論がある。

漱石のいはば世界史的位置、現代的意味といふものを、広い見地からあらためて考へてみたいと思つたからである。また漱石における「狂」の要素を、単に精神病理学的にみるのではなく、近代における天才の一例としてみたいと思つたからである。そして日本においては夏目漱石だけが、右のやうな考察の

対象になりうると私は思ふ。たとへば精神の不安の結果自殺した芥川龍之介には、知性による技巧がめだつて、漱石のもつてゐる内発的な爆発性が缺けてゐる。太宰治、坂口安吾等はスケールが小さい。

夏目漱石(一八六七—一九一六)は、近代における世界史的天才の運命を示してゐると同時に、世界史上における特殊な天賦の才を有する日本、近代日本といふ背景を強く背負つてゐる。(中略)近代・日本といふ言葉の内容は、相互に調和しがたいもの合成といふ困難な問題を含んでゐる。漱石の悲劇には、単に近代世界史における天才の運命的な悲劇ばかりではなく、近代・日本のなめざるをえなかつた悲劇を含んでゐる。その二つの要素がかさなり合つて漱石にあらわれてゐると私は思ふ。

## 二 戦後の研究

単行本では、赤木桁平の著『夏目漱石』(大正6年5月、新潮社)を嚆矢として、漱石(文学)に関する評論は、戦前にも既に総量においても多数刊行されている。

漱石の研究は、その量を・その質を、そしてその方法論を、他の多くの近代作家の中にあつても、先駆的に・先鋭的に引つ張つて来た。漱石の「研究」の軌跡を追迹することは、取りも直さず近代文学研究の「学」の歴史でもある。

\*昭和20年(1945年)8月15日正午、戦争終結の「詔勅放送」、太平洋戦争が終わる。

\*昭和21年11月3日、日本国憲法公布される。昭和22年5月3日施行される。

漱石の「研究」も、戦後（昭和20年）、本格的に始まる。

3 『漱石論』の刊行と言っても、戦前に本格的なものがなかった訳ではない。

○昭和17年に、吉田六郎の著『作家以前の漱石』（昭和17年10月、弘文堂書房）がある。『吾輩は猫である』誕生までを、「私の自覚史」の観点から捉える。

○昭和18年の、岡崎義恵の著『日本藝術思潮第一巻 漱石と則天去私』（昭和18年11月、岩波書店）は、記念碑的な論考である。

○昭和23年に、猪野謙二の論考がある。

『「明暗」における漱石——虚無よりの創造——』（昭和23年3月、「思潮」と、『心』における自我の問題）（昭和23年12月、「世界」）である。ともに、「自意識の煉獄」を凝視する。

『「明暗」における漱石——虚無よりの創造——』を、次に引用する。

一方に底知れぬ心理的虚無の深淵を望みつつ、更にこの素材にして赤裸々な「我」の肯定から出発する情熱とは、すこし大袈裟な言葉づかいが許されるならば、すなわち「虚無からの創造」とでもいうべきか。（引用は、『明治の作家』、昭和41年11月、岩波書店による）

\*昭和23年6月13日、太宰 治（39歳）が、山崎富栄（妻ではない）と、玉川上水に入水自殺する。『人間失格』（昭和23年8月

「展望」の終わり近くに、次の独白がある。

眠ろうとして下剤を飲み、しかも、その下剤の名前は、ヘノモチン。

いまは自分には、幸福も不幸もありません。

ただ、一さいは過ぎて行きます。

（中略）「人間」の世界において、たった一つ、真理らしく思われたのは、それだけでした。

ただ、一さいは過ぎて行きます。

\*昭和30年（1955年）、石原慎太郎の『太陽の季節』が、芥川賞になる。「古い道徳の殻」を破る。「太陽族」なる若者出現する。文壇では、「太陽の季節」論争が展開される。

○昭和31年に、唐木順三の著『夏目漱石』（昭和31年7月、修道社）がある。同著には、以後の『明暗』論には必ず閲される『「明暗」論』を収録する。『改訂新版夏目漱石』（昭和41年8月、国際日本研究所）には、「漱石における『狂』の問題」が増補される。

○昭和31年12月号の「國文學」（学燈社）は、「特集 夏目漱石の総合探求」が組まれている。巻中、井上百合子編の「夏目漱石研究文献総覧」は、（A）単行本研究書、（B）漱石特集の雑誌、（C）雑誌新聞論文と分類されて、昭和31年現在の、漱石研究の総量が報告されている。この時点でも、その蓄積の総量に驚かされる。

4 「暗い漱石像」昭和20年代後半、作品『夢十夜』に・それも特

に『第三夜』に、暗い漱石が言われる。

○伊藤 整は、「解説」(『現代日本小説大系』16、河出書房、昭和24年5月)に、言う。

現実のすぐ隣りにある夢や幻想の与へる恐ろしさ、一種の人間存在の原罪的な不安がとらへられてゐる。この試作的な作品によつて彼はその内的な不安な精神にはつきりした現実感を与へたのである。

○荒 正人は、「漱石の暗い部分」(『近代文学』、昭和28年12月)に、言う。

私はこの奇妙な小品文を、漱石における暗黒の部分の重要な指標と解釈する。(中 略)

ここは、漱石の最も暗い部分だ。(引用は、『日本文学研究資料叢書 夏目漱石』、有精堂、昭和45年1月による)

○平野 謙は、「暗い漱石(一)」(『群像』、昭和31年1月)に、言う。

夏目漱石のことといえば、いつも思い出す言葉がある。「(前略) 漱石つて奴あ暗い奴だつたんだ。陰気で気狂ひ見てえに暗かつたんだ。ほんとうに気狂ひでもあつたんだ。(後 略)」という言葉(中野重治「小説の書けぬ小説家」(『改造』昭和11年1月)の主人公の独白―論者注)を、私はいつも思ひ出すかべるのである。

5 江藤 淳の『夏目漱石』 昭和31年の江藤 淳の著『夏目漱石』

(昭和31年11月、東京ライフ社)に、次の発言がある。

夏目漱石の死後、すでに四十年の歳月が流れている。忘れ去られるには充分な時間であるが作家の名声はいよいよ高い。

(中 略) 元来、個性的な作家が存在し、多くの崇拜者を持つような場合、その死後四半世紀乃至は半世紀の間はある意味での神話期であつて、この時期はほぼ正確に崇拜者達―多く、弟子友人等の人々―の寿命と一致している。作家は彼らの追憶の中で神の如き存在となり、様々な社会や趣向の変遷に乗じて、神話はやがて歴大な分量にふくれ上る。(引用は、『夏目漱石』、講談社、昭和35年2月による)

同著「あとがき」に、

英雄崇拜位不潔なものはない。ぼくは崇拜の対象になつてゐる漱石に我慢がならなかつたのだ。

とある通り、江藤 淳の漱石論は偶像破壊・漱石神話の剥奪を、主意として出立する。江藤の論調の基底には、漱石の抱え込むという「低音部」が強調される。

初出誌「三田文学」(昭和30年12月)掲載(当時慶応義塾英文科の学生)の「夏目漱石論(上)―漱石の位置について―」が、江藤 淳を「批評家」として世に送り出す。「三田文学」発表以後の、19年間に書かれた漱石に関する、すべての「評論」「エッセイ」を収録する、『決定版夏目漱石』(昭和49年11月、新潮社)がある。

6 ○昭和34年、岩上順一の著『漱石入門』(昭和34年12月、中央

公論社)は、『倫敦塔』から『明暗』までの漱石のほとんどの作品について、忠実過ぎるくらいに作品に即して論述されている。作

家論であり、作品論である。

『夢十夜』についても、基本的な立場が示される。

これは夢の記述という形式を借りてはいるが、そこには漱石の意識作用による加工と再構成が十分に加わった文学作品とみて、文学作品にたいするとおなじ態度でこれを扱っていくのが正しいと考える。

○昭和38年の、片岡良一の著『夏目漱石の作品』（昭和38年12月、厚文社書店）は、文学史家の行き届いた公平な眼がある。

岩上順一・片岡良一ともに、歴史社会学派の学風であり漱石研究の先行者である。

\*昭和35年（1960年）、「安保改定阻止行使」広まる。全学連主流派が、国会突入をはかり警官隊と衝突、東大生・樺 美智子死亡する。「60年安保」の年である。

#### 7 「座談会」がある。

昭和36年に、柳田 泉・勝本清一郎・猪野謙二編『座談会明治文学史』（昭和36年6月、岩波書店）がある。4年間、11回にわたり、「明治文学史」の全体を貫く「座談会」である。

「それぞれに明治文学の本質もしくはその理想としたところを、研究者としての主体そのものにおいてほとんど過不足なく体現しておられる」（猪野謙二の言）柳田 泉・勝本清一郎を中軸に、猪野謙二が司会をする。

「僕はだいたい漱石の孫弟子に当るので、安倍能成さん、小宮豊隆さん、阿部次郎さん、和辻哲郎さん、みんな僕の怖い師匠です」

（勝本清一郎の言がある）。漱石の座談会には、荒 正人も入る。

漱石の「座談会」の最後には、次の発言が置かれている。

勝本清一郎 漱石は露伴、鷗外、藤村と最後の決勝点を争った人だと思いますが、四人のなかでさらに一人だけを抜くとすれば、やはり漱石ですよ。

猪野 謙二 私も、ひそかに申しますと明治以後の近代文学の中で最後に残すのは漱石なんです。実はずっとそうなんです。

明治文学（史）の骨格・肌触りが、同時代に近い参加者の発言から確として浮かぶ。明治文学（史）研究の古典であり、座談会形式の嚆矢である。

\*昭和36年4月12日、ソ連宇宙船ヴォストーク1号、地球一周飛行に成功する。搭乗は、ガガーリン少佐である。人類最初の、「人間の宇宙飛行」である。

\*昭和38年3月、日本近代文学館が、開館する。

「日本近代文学館 設立の趣意Ⅱ」（昭和38年11月、日本近代文学館）に、西尾 実の次の挨拶文がある。

近代文学館が設立されることは、まことによるこぼしい。わけても、その文学館を「近代」と限定したところに千鈞の重みがある。

同誌に、柳田 泉の発言もある。

これができる前、ともかく劃期的な福音であったのは、東京大学の中の「明治新聞雑誌文庫」の出現であったが、今度は、何層倍もの大がかりな仕事であり、その恩恵ははかりしれない

ものがある。

現在発行の、会報「日本近代文学館」は、近代文学に関するあらゆる「史料」「情報」を発信し続けている。

\*昭和39年、新幹線が開業し・東京オリンピックが開催される。

柴田 翔の『されどわれらが日々』が、芥川賞になる。「ひとつの世代が」（青春と政治の季節が）切なく描かれる、青春文学の古典である。終章に、次の独白がある。

節子は、おそらく私が始めて本当に節子が必要とした時、私から離れて行った。(中略)年をとったと言うには、あまりに若い年齢だが、やはり年をとったのだらう。私たちの世代は、きっと老いやすい世代なのだ――、その老い方は様々であるとしても。(中略)

節子はまだ老いることを拒否している。ことよつたら、節子は私たちの世代を抜け出るものかも知れない。

8 昭和40年(1965年)には、成瀬正勝・湯地 孝・橋本芳一郎編著 国語国文学研究史大成14「鷗外 漱石」(昭和40年7月、三省堂)が、刊行される。同時代評も収録する、大部な「漱石研究史」の総覧である。

\*昭和40年、『明治文学全集』(筑摩書房)の、刊行始まる。底本は、編者選定の最良底本に厳密な校合・校訂を加え、可能な限り「原文」の形を尊重する。昭和58年、『明治文学全集』(本巻九九巻)が、完結する。

明治文学全集「内容見本パンフレット」に、柳田 泉の、「刊行

開始に際して寄せられた編集代表のことば」がある

従来、奈良朝、平安朝の文学は、日本文学史史上、画期的な古典の名によって尊重されて来たが、今日では、正直をいうと明治文学も、西洋を消化して世界に比肩したという点で、これ等に劣らぬ古典的威厳をもっているものである。

明治文学(文化)の全容が・本文の閲覧が、可能となる。

\*昭和40年9月、三島由紀夫の『春の雪』(「豊饒の海」の第一巻)の、「新潮」連載が始まる。

### 三 作品論の季節

9 昭和42年に、三好行雄の著『作品論の試み』(昭和42年6月、至文堂)が、世に出る。

序の、「鑑賞と批評―序にかえて―」に、理論構築が置かれている。次に引用する。

鑑賞が一種の創作であることを認める以上、おなじ文学作品に対して、鑑賞者の個人差はとうぜん許容される。まして、感受性の劇でもある原発的な段階では、極端に言えば、享受者の数だけ鑑賞は存在しうるわけで、鑑賞とはもともとそういうものかもしれない。あるひとつの作品が、人によって、また時代によって、多くのちがった享受のしかたを存在させてきたゆえんである。

しかし、だとしても、鑑賞を原発的な段階で野放しにしておくわけにはゆくまい。無数の鑑賞に対して、その帰結する唯

一の正しい鑑賞が想定できるか、どうかという問いがつきに来る。(中略)基準は作品の表現的構造それ自体である。作品世界の全体像の正確な認知と、世界の提示する意味の完全な理解、可能性としては存在するが現実にはおそらく仮定にすぎぬ、そうした完璧な対象の領略によってなりたつ鑑賞を、わたしたちはやはりただしい鑑賞と呼ぶことができよう。いや厳密には、ただしいという言葉は避けるべきであつて、より高度な、あるいは、より高次の鑑賞と呼ぶべきであるが、それにしても鑑賞の究極の目標ないし理念の想定は不可能ではない。(引用は、『作品論の試み』、至文堂、昭和52年5月による)

同著「あとがき」に記された、次の言辞はあまりにも有名である。

こうした仕事がそれを自己目的とするかぎり、一種の出口のない部屋に似ているのは確かである。

同著には、漱石論では、「迷羊の群れ——「三四郎」夏目漱石」一本が収録されている。

○後年に、三好行雄・平岡敏夫「対談Ⅱ漱石図書館からの展望」(『解釈と鑑賞』、昭和59年10月)に、自論への弁がある。

平岡 (前略)三好さんだと『三四郎』は明晰に説きお

おせているという自信があるかも知れませんが。

三好 いや、説きおおせるかどうかということではなく

て、もう私としては、あれ以外の読みようが出来ないということなんです。

「あれ以外の読みようが出来ない」とは、恣意とか期待(論者の)

ではなく、その作品の内部に「客観的に実在する」ものを、全面的に引き出すと、即ちそうなるしかないということである。

以後、近代文学の「研究」は、作品論の季節に入る。

○三好行雄は、平成2年(64歳)、死去する。

死後、『三好行雄著作集』(筑摩書房)が、刊行される。

『三好行雄著作集 第一巻「島崎藤村論」』(平成5年7月)。

『三好行雄著作集 第二巻「森鷗外・夏目漱石」』(平成5年4月)。

『三好行雄著作集 第三巻「芥川龍之介論」』(平成5年3月)。

『三好行雄著作集 第四巻「近現代の作家たち」』(平成5年5月)。

『三好行雄著作集 第五巻「作品論の試み」』(平成5年2月)。

『三好行雄著作集 第六巻「近代文学史の構想」』(平成5年6月)。

『三好行雄著作集 第七巻「詩歌の近代」』(平成5年9月)。

『作品論の試み』が、近代文学全般に渡り、実践化されている。

『鑑賞日本現代文学第5巻「夏目漱石」』(昭和59年3月、角川書店)は、三好行雄が担当している。

10 昭和42年には、吉川幸次郎の著『漱石詩注』(昭和42年5月、岩波新書)が出ている。

中国文学の一代の訓詁学者・吉川の同著の「序」は、含蓄がある。

先生はこの形式によっても、自己を表白することを、愛し



た。あるいは、欲した。(中略)その詩が、日本人の作った漢語の詩としては、すぐれることである。もう一步を進めていかならば、日本人の漢語の詩として、めずらしくすぐれることである。その原因は、思索者の詩である点で、おおむねの日本人の漢詩とことなる、ということである。

「語注」に、「この句も禪語にもとづくらしいが、禪にうとい私には未詳」、「この句の意は、禪語にもとづくらしく、禪にうとい注釈者には分らない」と散見して、禪語への注解は、意識的に拒否されている。

昭和40年版の、岩波書店の『漱石全集』に、漢詩の「読み下し」と「語注」が初めて付く(それ以前の全集では、白文のみの掲載)。その「読み下し」と「語注」担当が、吉川幸次郎である。『漱石全集第十二巻 初期の文章及詩歌俳句』(昭和42年3月、岩波書店)である。『漱石詩注』(岩波新書)は、右の『漱石全集』収録の「読み下し」「語注」に、「序」が付けられたものである。同著は、『漱石詩注』(平成14年9月、岩波文庫)として、再版される。

○平成版の新版『漱石全集』の、「読み下し」「語注」担当は、一海知義である。新版の『漱石全集第十八巻 漢詩文』(平成7年10月、岩波書店)の、一海の「語注」は、「禪的エレメント」も取捨されていて、より総合的である。

\*昭和43年(1968年)は、明治1000年である。東大安田講堂が占拠される。大学紛争が、全国に広まる。

\*昭和44年、東大安田講堂の封鎖解除に、機動隊が導入される。

昭和44年度の東大入試は、中止となる。芥川賞は、庄司 薫の

『赤頭巾ちゃん気をつけて』である。『赤頭巾ちゃん気をつけて』の主人公は、東大を受験出来ない。全国の大学生・高校生に愛読される。安田講堂のバリケードの中でも、回し読みされる。

7月21日、アポロ11号が月面着陸に成功し、人類が初めて月の上に立つ。

11 ○昭和45年に、江藤 淳の著『漱石とその時代第一部』(昭和

45年8月、新潮選書)・『漱石とその時代第二部』(昭和45年8月、新潮選書)が出る。

『漱石とその時代第二部』の最後は、次の有名な文で終わる。

虚子がこの原稿をたずさえて子規庵の山会に出たときには、定刻を大分すぎていた。参加者一同は虚子が朗読するのを聴いて、「とにかく変わっている」と異口同音に讃辞を呈した。吾輩は猫である』は、「ホト、ギス」明治三十八年一月号に掲載されることに決った。そのとき文科大学講師夏目金之助は、誰にも、おそらく彼自身にも気づかれぬところで、作家夏目漱石に変身していた。

江藤自身の弁が、「座談会・わが漱石像」(『國文學』昭和46年9月臨時増刊号)にある。

それにしても越智さんが、「坊っちゃん」を初めて読んで抱腹絶倒したときの様な印象では書けなかったとおっしゃったのはおもしろいと思います。私の「漱石とその時代」についても、「もっと明るくてもいいのではないか」という感想を聞かせて下さった方があった。それは非常に、そうだろうなあ

と思ったんですよ。どうしてそう書けないんだろうと思って……。

『漱石とその時代第一部』・『漱石とその時代第二部』は、「暗い漱石」像に、位置する。

昭和45年、漱石研究の上昇期・最盛期という時代の追い風に乗って、右『第一部』『第二部』は、世評高く迎えられる。漱石論の好著であり、漱石論の記念碑的著書である。『漱石とその時代第一部』・『漱石とその時代第二部』には、評家・江藤 淳の書き手としての幸福な吐息が感じられて、生彩がある。

○『漱石とその時代』は、江藤のライフワークであった。20年振りに稿が起こされ、『漱石とその時代第三部』が平成5年10月に、『漱石とその時代第四部』が平成8年10月に、『漱石とその時代第五部』（未完、『明暗』時代はない）が、平成11年12月に刊行される。

しかし『第三部』以降は、生彩を欠いている。論旨自体も、真如からずれ出す。例えば、「この手紙に現われている漱石の幼なさはほとんど噴飯ものといわなければならない。」（『漱石とその時代第五部』）では、磯田多佳あて漱石書簡の真意が矮小化されよう。「素人と黒人」（大正3年）で、「素人の尊さ」を漱石は本気で言っているのだから。磯田多佳との応答は、「素人と黒人」の実践でもあったのだから。

『漱石とその時代第三部』は、平成2年11月に稿が起こされる。平成2年は、作品論の時代に入って久しい。平成3年には既に『漱石作品論集成』（全十二巻、別巻一巻）も出ている。それぞれの作

品にたいする、厩大にして詳細・正鵠な「作品論」が、巷には溢れていた。江藤 淳をしても、それぞれの「作品論」を咀嚼せずに評家の能才だけでは、『漱石とその時代第三部』以降は、書き切れないだろう。『漱石とその時代第三部』以降の論旨の「薄さ」は、逆にこの時期への漱石研究の、蓄積の総量の「厚さ」を物語っている。

○江藤は、平成11年（68歳）自殺する。「以来の江藤淳は形骸に過ぎず。自ら処決して形骸を断ずる」（7月21日の遺書）がある。

江藤 淳は、デビュー時の華々しさと・仕事の密度の高さに反比例して、晩年の仕事は、崩折れている。

\*昭和45年（1970年）11月25日、三島由紀夫（45歳）、市谷の陸上自衛隊東部方面給監部で、割腹自殺する。

11月25日、三島は、『天人五衰』（『豊饒の海』第四巻）の最終回を、既に脱稿している。『天人五衰』の最終回の原稿（三重に封印された・新潮社に渡す）には、『豊饒の海』完。昭和四十五年十一月二十五日」と、記されていた。『天人五衰』の最後は、次の文で終わる。

数珠を繰るやうな蟬の声がここを領してゐる。

そのほかには何一つ音とてなく、寂寞を極めてゐる。この庭には何もない。記憶もなければ何もないとこへ、自分は来てしまつたと本多は思った。

庭は夏の日ざかりの日を浴びてしんとしてゐる。……

12 ○昭和46年に、越智治雄の著『漱石私論』（昭和46年6月、角川書店）が出る。

漱石論の、記念碑的著書である。今や「神話」として語られる、伝説の書でもある。鋭い感性と論理化のせめぎ合う・煮詰まった文  
体は読みにくいとの定評がある。

「あとがき」に、次の、有名な文がある。

最後に、私の漱石論のよき導きでありつづけた一つの言葉を  
書き写しておく。

演奏家の独自の楽譜の読み方をするごとと、傑作を（原形  
に戻す）ごとと、この二つは矛盾することもよくあるけれど  
も、さればといっておよそ（読み方）をすべて捨てれば、原  
形が戻ってくるというものではないのである。そうではなく  
て、私たちは、ますます深い読み方への道をたどってゆくほ  
かに（原形）に達する道はないのだ（吉田秀和氏著『現代の  
演奏』）。

私が深い読み方に至りえているとは言えないが、本書が私の  
「読み方」の記録であることだけは確かである。

○三好行雄の感想が、「座談会・わが漱石像」（『國文學』、昭和46  
年9月臨時増刊号）にある。

「猫」とか「漾虚集」の論文を読んだときに越智君に言った  
ことがありますけれども、「これじゃ漱石が苦しくてしょうが  
ないだろう」といったふうな感してね……。

『漱石私論』は、俯瞰すれば昭和24年・伊藤 整の「一種の人間  
存在の原罪的な不安」を嚆矢とする、「暗い漱石」像の帰結でもあ

る。『漱石私論』は、暗く、重く、深刻である。

三好行雄・平岡敏夫の、「対談Ⅱ漱石図書館からの展望」（解釈と  
鑑賞）、昭和59年10月号）に、三好行雄の次の総評がある。

『漱石私論』という本は幸せな本という気もします。そうい  
う対象を持ち、そのように書けるということは。（中 略）越  
智さんそのものの、何か原質的なものがあって、それが漱石と  
の出会いでこういう形になってくる。『漱石私論』という言い  
方は、やはり本当に私論であって、誰もそれを真似出来ない、  
それは一回限りの越智さんの存在証明のようなもので、（後  
略）

○昭和46年は、実存主義思潮期・漱石研究の高揚期・存在論的漱  
石論の隆盛期である。のちの、三好行雄・越智治雄の研究の骨  
格を形作ることとなる、三好・越智らが始めた「文学史の会」  
という、近代文学の「研究会」も前夜史の出来事としてあつ  
た。そして越智自身の「原質的なもの」と漱石との出会いと、  
「幸せな」偶然が重なっている。

『漱石私論』は、越智治雄にとって「必要な漱石の意味」を、徹  
底的に・自覚的に書いている。

○平成2年、『漱石作品論集成』が出る。

「全十二巻＋別巻一」『漱石作品論集成』（平成3年3月～平成3  
年12月、桜楓社）である。漱石の主要作品ごとに、企画委員二名  
が、必読・重要な作品論を選択・収録する。

監修 玉井敬之、企画委員 浅田 隆・浅野 洋・太田 登・鳥  
井正晴・藤井淑禎・堀部功夫・村田好哉である。漱石研究は、益々

歴大に膨れ上がり、専門の研究者ですら、どこから手を着けてよいか解らない現況がある。研究への案内記が、それこそ案内記への「案内記」が必要とされた。漱石研究の、一代「交通整理」である。

最終巻である、鳥井正晴・藤井淑禎編『漱石作品論集成』第十二巻「明暗」(平成3年11月)の、鼎談の最後を、次に引用する。

太田 『漱石作品論集成』そのものの鼎談も最後になりました。(中略) この『漱石作品論集成』そのものが果たす役割について一言ご意見をいただければと思います。

鳥井 今更ながら、漱石研究の総体としての蓄積の力というものを感しました。だから安直な卒論対策のガイドブックになってしまつては困るなということがまずあります。それと結果として越智治雄さんの『漱石私論』から、十一本も収録されて、十二巻のうち九巻に入ったわけですね。だから『漱石私論』が解体されてバラバラになつちやつたということになるのですけれども、これは残された別の課題ですね。

平成3年11月現在、『漱石作品論集成』(全十二巻)に、11本の越智論文が収録されている。企画委員同士の、事前の打ち合わせはしていない。この期、『漱石私論』が、いかに根強い影響力があつたかが解かる。

越智治雄には、「漱石と夢の極点」、「倫敦塔再訪」を収録する、『漱石と文明』(昭和60年8月、砂子屋書房)もある。越智治雄は、昭和58年(53歳)、死去する。『漱石と文明』は、十川信介・前田

愛ほかによる編集である。

○昭和46年、刊行中の『明治文学全集』は、「夏目漱石集」の、配本である。

『明治文学全集』第55巻「夏目漱石集」(昭和46年6月、筑摩書房)である。巻の編集は、猪野謙二である。

13 ○昭和49年に、荒正人の著『漱石研究年表』(昭和49年10月、集英社)が出る。

集英社の『漱石文学全集』(全十巻)の、別巻である。総565頁がすべて、漱石の一生(49歳と10ヶ月)の、伝記に当てられている。

昭和59年に、小田切秀雄監修『増補改訂漱石研究年表』(昭和59年6月、集英社)が出る。総891頁に増えている。小田切秀雄の『増補改訂版「後記」』を、引く。

その詳細というのは、一つの事実をたしかめるためにも実に多くの文献をあさり、また多くのひとをさがして会いに行く、というような労苦が果てもなくつみ重ねられてようやく可能になつたところのもので、この年表の背後には荒正人の猛烈な調査探索の持続があり、それは漱石とのいつ終るとも知れぬ格闘にほかならなかつた。(中略) かれはわたしと同じ勤め先の大学の教授室でいつも電話の前に長時間座りこんで、かれ独特の厚い名簿を前にして北海道から鹿児島にまで電話をかけ続けている——それがみな漱石に関する問い合わせであった(学校でのかれの長距離通話料が月四十万ほどになって問題になりか

けたことがある。(中略)ダンテやシェークスピアについても、ゲーテやトルストイやドストイエフスキーについても、こまなくわしい年表は出ていない。かれは漱石について分・秒まで明らかにしたい、といていた。

晩年の荒 正人の、長電話と長距離電話は有名である。晩年の荒は、漱石を語っては口吻泡を飛ばす・漱石への思い入れは、「狂」の様を呈する程に凄まじい。

『漱石研究年表』は、漱石研究者にとって、必須の「座右の書」である。最近、漱石研究者によって、記事の誤謬と調査不足が除々に指摘されつつある。

○昭和45年に江藤 淳著『漱石とその時代第一部』『漱石とその時代第二部』が、昭和46年に越智治雄著『漱石私論』が、昭和49年に荒 正人の『漱石研究年表』がと、漱石研究の記念碑的「著作」が昭和40年代後半に輩出することは、偶然ではないだろう。漱石死去・半世紀と少し、漱石研究が蓄積し、そして「収穫」の季節を迎える。

14 昭和40年代後半には、とりわけ『夢十夜』・『漾虚集』が脚光を浴びる。『夢十夜』・『漾虚集』にこそ、漱石文学の原点があると言われる。

同時に、初期作品、「作家以前の漱石」が注目される。

○昭和46年に、日本文学協会編集「日本文学 特集―夏目漱石・『夢十夜』」(昭和46年4月、未来社)が、『夢十夜』の特集を組む。

○昭和46年に、柄谷行人の「内側から見た生―『夢十夜』論」(昭和46年7月、「季刊藝術」)がある。

○昭和47年に、日本文学協会編集「日本文学」(昭和47年6月、未来社)が、「明治四十年以前の漱石」の、特集を組む。

○昭和48年に、ジャン・ジャック・オリガスの「蜘蛛手」の街―漱石初期の作品の一断面」(昭和48年1月、「季刊藝術」)がある。

○昭和48年に、「シンポジウムⅡ漱石の作家的出発をめぐって」(昭和48年4月、「國文學」)が、企画される

○昭和49年に、日本文学協会編集「日本文学」(昭和49年5月、未来社)が、「明治三十九年・漱石とその周辺」の、特集を組む。

○昭和52年に、秋山 駿・柄谷行人「対話 漱石と現代」(昭和52年11月、「ユリイカ」)に、柄谷行人の、次の発言がある。

今の精緻な漱石研究というものがなにか不愉快なんです。非常にこまかくなっているけども、どこか根本的にだめなんじゃないかという気がする。今年日本へ帰って来てから(アメリカから―論者注)、ある雑誌の「漱石特集」というのを読んだ、もう本当に泣きたくなるような気がした。(中略)

ほかの場合は、漱石についての関心が、漱石の年令でいえばすごく若返ってきている。学者の時期の漱石にいまは興味がありますね。

○三好行雄・平岡敏夫「対談Ⅱ漱石図書館からの展望」(昭和59年10月、「解釈と鑑賞」)に、平岡の次の発言がある。

越智さんも、桶谷さんもこういう（ユーモア文学のような—論者注）『坊っちゃん』が自分の漱石像の中に入ってくる必要はない。「坊っちゃん」論がないということ、これは昭和四十年の中頃までずっとそうでした。

越智治雄の『漱石私論』は、昭和46年に出る。桶谷秀昭の『夏目漱石論』（河出書房新社）は、昭和47年に出る。「昭和40年の中頃まで『坊っちゃん』論がないということ」と、『夢十夜』・『漾虚集』が注目され、「作家以前の漱石」に関心が向かうことは、正比例の関係である。

15 また、昭和40年代後半、「漱石の恋人探し」が、トピックになる。

江藤 淳は、兄・和三郎の妻「登世」を、意中の人と見る。小坂 晋は、友人の大塚保治の妻「桶緒子」を、意中の人と見る。宮井一郎は、『永日小品』の中の『心』の女（花柳界周辺に生活する）を、漱石の恋愛体験の告白と見る。各論者それぞれに、歴大な考証を重ねる。

昭和47年7月、「文学」（岩波書店）は、中山和子、小坂 晋、宮井一郎三者の、「漱石の恋人」論考を、掲載する。

#### 四 「國文學」・「解釋と鑑賞」の、漱石特集号

16 国文学の専門雑誌「國文學」（学燈社）と、「解釋と鑑賞」（至文堂）が、漱石の特集号を頻繁に組み出す。「源氏物語」の特集

号よりも、断然と多いだろう。漱石の特集号は、群を抜いている。

○「國文學」（学燈社）の漱石特集号は、以下の通りである。

整理番号① 「國文學」昭和31年12月号 特集・夏目漱石の総合探求

② 「國文學」昭和43年2月号 特集・漱石文学の人間像

③ 「國文學」昭和44年4月号 特集・漱石文学の世界

④ 「國文學」昭和45年4月号 特集・漱石文学の構図

⑤ 「國文學」昭和46年9月臨時増刊号 特集・夏目漱石の手帖併せて、「漱石研究文献目録」（昭和45年3月〜46年3月）の、掲載が始まる。（仮に整理番号①とする）

漱石論は年間、雑誌論文が200本、単行本が20冊と言われる。

⑥ 「國文學」昭和48年4月号 特集・漱石文学の原点

「漱石研究文献目録」（昭和46年4月〜47年12月）、掲載される。（整理番号②）

⑦ 「國文學」昭和49年11月号 特集・漱石文学の変貌

「漱石研究文献目録」（昭和48年1月〜49年6月）、掲載される。（整理番号③）

⑧ 「國文學」昭和50年11月号 特集・江藤 淳・その軌跡と現在 特集2・夏目漱石

「漱石研究文献目録」（昭和49年7月〜50年7月）、掲載される。（整理番号④）

⑨ 「國文學」昭和51年11月号 特集・夏目漱石—作品に深く測

鉛をおろして

併せて、「作品別夏目漱石研究史」を、掲載する。

⑨ 「漱石研究文献目録」(昭和50年8月～51年7月)、掲載される。(整理番号⑤)

⑩ 「國文學」昭和53年5月号 特集・夏目漱石 出生から明暗の彼方へ

「漱石研究文献目録」(昭和51年8月～昭和53年1月)、掲載される。(整理番号⑥)

⑪ 「國文學」昭和54年5月号 特集・夏目漱石 新しい視角を求めて

「漱石研究文献目録」(昭和53年2月～昭和54年1月)、掲載される。(整理番号⑦)

⑫ 「國文學」昭和56年10月号 特集・漱石「三四郎」と「ころ」の世界

「漱石研究文献目録」(昭和54年2月～昭和56年4月)、掲載される。(整理番号⑧)

⑬ 「國文學」昭和57年9月号 特集・猫の文学博物誌

⑭ 「國文學」昭和58年11月号 特集・夏目漱石 比較文学の視点から

「漱石研究文献目録」(昭和56年5月～昭和57年12月)、掲載される。(整理番号⑨)

⑮ 「國文學」昭和61年3月号 特集・漱石「道草」から「明暗」へ

れる。(整理番号⑩)

⑯ 「國文學」平成元年4月号 特集・夏目漱石伝・作品への通路

「漱石研究文献目録」(昭和62年1月～昭和63年6月)、掲載される。(整理番号⑪)

⑰ 「國文學」平成4年5月号 特集・漱石論の地平を拓くもの――いま作品を読む

⑱ 「國文學」平成6年1月臨時増刊号 特集・夏目漱石の全小説を読む

併せて、「作品ごとに「研究の現在」と「作品の分析」を、掲載する。

⑲ 「國文學」平成9年5月号 特集・夏目漱石 時代のコードの中で

⑳ 「國文學」平成13年1月号 特集・新しい漱石へ

㉑ 「國文學」平成18年3月号 特集・漱石・世界文明と漱石

㉒ 「國文學」平成20年6月臨時増刊号 特集・漱石 ― ロンドン、中国などで何が起こったか

○ 「解釋と鑑賞」(至文堂)の漱石特集号は、以下の通りである。  
整理番号① 「解釋と鑑賞」昭和31年12月号 特集・漱石・作品論と資料

② 「解釋と鑑賞」昭和39年3月号 特集・夏目漱石研究図書館併せて、「作品論・同時代批評と評価の変遷史」を、掲載する。

③ 「解釋と鑑賞」昭和43年11月号 特集・漱石と明治

- ④ 「解釋と鑑賞」昭和45年9月号 特集・新しい漱石像  
 ⑤ 「解釋と鑑賞」昭和50年2月号 特集・夏目漱石の軌跡  
 ⑥ 「解釋と鑑賞」昭和53年11月号 特集・夏目漱石（その虚像と実像）

- ⑦ 「解釋と鑑賞」昭和54年6月号 特集・“吾輩は猫である”  
 ⑧ 「解釋と鑑賞」昭和56年6月号 特集・夏目漱石 表現としての漱石

- ⑨ 「解釋と鑑賞」昭和57年11月号 特集・夏目漱石  
 ⑩ 「解釋と鑑賞」昭和59年10月号 特集・新・夏目漱石研究圖書館

この巻には、三好行雄・平岡敏夫の「対談Ⅱ 漱石図書館からの展望」を、掲載する。

次に、その一部を引く。漱石の研究が自覚的にされていく段階が、浮かびあがる。

- 三好 「夏目漱石研究図書館」という特集が昭和三十九年、ちょうど二十年前にあつて、それを受けた「新」ということでしようけれど、（後 略）

三好 多分三十九年でしたか、この前後、漱石に限らず研究史というようなものが一つの研究領域として問題になつてきて、戦後二十年近くたつて研究の蓄積ができ、研究史を踏まえなくてははいけないということを、（後 略）

平岡 戦後二十年たつた段階でやはり研究史にも自覚的に、作品についてどんな細部も見逃さないでいこうという方向が徐々にできつつあつたんでしよう。

平岡 あと『漱石とその時代』が四十五年に出ますから、結局、この間の二十年の漱石研究の歩みがいろいろな形であつたわけです。これは研究自体が一種のドラマのようなところがあつて、（後 略）

- ⑪ 「解釋と鑑賞」昭和63年8月号 特集・夏目漱石―作家論と作品論

- ⑫ 「解釋と鑑賞」平成2年9月号 特集・夏目漱石文学にみる男と女

- ⑬ 「解釋と鑑賞」平成7年4月号 特集・夏目漱石研究のために

- ⑭ 「解釋と鑑賞」平成9年6月号 特集・外国人が見た夏目漱石

- ⑮ 「解釋と鑑賞」平成13年3月号 特集・二十一世紀の夏目漱石

- ⑯ 「解釋と鑑賞」平成17年6月号 特集・ジエンダーで読む夏目漱石

- 17 「事典」「辞典」類も、整い出す。

- 鹽谷 贊編『夏目漱石事典』（昭和31年8月、創元社）。

- 實方 清編『夏目漱石辞典』（昭和47年4月、清水弘文堂）。

- 江藤 淳編『朝日小事典 夏目漱石』（昭和52年6月、朝日新聞社）。

- 竹盛天雄編『夏目漱石必携』（昭和55年2月、学燈社）。

- 竹盛天雄編『夏目漱石必携Ⅱ』（昭和57年5月、学燈社）。



○古川 久編『夏目漱石辞典』（昭和57年11月、東京堂出版）。

○三好行雄編『夏目漱石事典』（平成2年7月、学燈社）。

○平岡敏夫・山形和美・景山恒男編『夏目漱石事典』（平成12年7月、勉誠出版）。

○今西幹一企画 佐藤裕子・増田裕美子・増満圭子・山口直孝編『坊っちゃん事典』（平成26年10月、勉誠出版）。

○原武 哲・石田忠彦・海老井英次編『夏目漱石周辺人物事典』（平成26年7月、笠間書院）。

## 五 昭和五〇年代初頭

18 昭和50年に、佐藤泰正・越智治雄・平岡敏夫・高木文雄・相原和邦「シンポジウム」日本文学<sup>⑭</sup>『夏目漱石』（昭和50年11月、学生社）が出る。

佐藤泰正が、司会である。第一章「作家漱石の出發」から、第四章「『道草』から『明暗』へ」まで、まず参加者の「報告」があり、その後、長い討議がなされる。『座談会明治文学史』が、一の作家（項目）であったのに対し、「シンポジウム」日本文学<sup>⑭</sup>『夏目漱石』は、一作家・漱石だけを巡っての、漱石研究の専門家に拠る、質疑の一冊である。

昭和50年、漱石研究は一つの「達成」を迎える、その「緻密さ」に於いて、その「正鵠さ」に於いて、その「部分（箇所・作品）の、全体（作品・漱石全体）への統合性」に於いて――。

最後に、次の発言がある。

平岡 現在の漱石研究、漱石論というのは、たいへんな活況

というか、量的にもすごく多いわけです。われわれもそれをすべて目を通すというのは、至難のわざになりつつあるわけですけども、こういう状況はいつまで続くのか、まさにブームではないか。ブームというのは、消えるからブームなのである以上、この調子でいつまでも行くわけにはいかないのではないか。（中 略）

漱石の研究の歴史を見ましても、上がり下がりがありませんし、どうもこの状況を相対化できる目を私たちも持たざるを得ないのではないかといい気持があります。

相原 漱石にのめり込んでしまうと、全部の問題がそこにあるような感じになってしまう……。もちろん文学は神話でしか語れないというのも事実であるけれども、漱石神話は、いつも大きくつくられ過ぎる面があるように思います。

佐藤 作品論の構築を含めてですけども、いわば存在論的に読まれるという形で、桶谷さんの論だとか、それから柄谷行人さん、ああいう優秀な第一線の批評家がこぞって漱石に取り組んでいるし、（中 略）やはり知識人の問題を突き詰めていこうと思うと漱石に取り組まざるを得ない。

平岡 こういう存在論的な文学像が支配的な時代、そしてまた、そういう存在論的な漱石像の支配的な時代というのは、いつまでも続くとは思われない気がするんですが。

佐藤　　そういう存在論的な論議が続いて、それがまたおさまってゆく、そこで取り残されて、またそこに立っている漱石像とは何かという問題が、あらためて出てまいりますね。

古井由吉に、「漱石」というパスポート」（吉本隆明・古井由吉「対談」漱石の時間の生命力）平成4年9月、「新潮」と題された発言がある。

この国でもを書く人間は、ある年齢になると、パスポートを提示させられるようにして、漱石について話さなければならぬようですね。

この国の、「知識人」は漱石について語り出すだろう、あだかも自己が知識人であることの「存在証明」として、俊英な知識人（第一線の批評家）であることの「明証」としてである。

存在論的漱石論の時代が・批評家が本気で漱石と対峙する時代が、確実にあった。

\*昭和52年、三田誠広の『僕って何』が、芥川賞になる。冒頭を、次に引用する。

びっしりと藁が絡みついた図書館の（中略）その重く、わだかまったような空気の中に僕がいる。僕はここにいます。

ここにいます僕とは何だろう——。

存在の基盤を失った、「青春」が描かれる。  
\*昭和52年、日本近代文学館・編「日本近代文学大事典」全六巻（講談社）が、刊行される。

『日本近代文学大事典 第一巻』人名（あ〜け）（昭和52年11月）。

『日本近代文学大事典 第二巻』人名（こ〜な）（昭和52年11月）。

『日本近代文学大事典 第三巻』人名（に〜わ）（昭和52年11月）。

『日本近代文学大事典 第四巻』事項（昭和52年11月）。

『日本近代文学大事典 第五巻』新聞・雑誌（昭和52年11月）。

『日本近代文学大事典 第六巻』索引その他（昭和53年3月）。

戦後から始まった近代文学の研究は、昭和30年代の助走期、40年代の興隆期を経て、昭和50年代、「日本近代文学大事典」の刊行を可能にする。「日本近代文学大事典」の刊行は、この期までの、日本近代文学に対する「研究」の、蓄積の総体である。

国文学研究とは、従来「古典」研究の謂であったが、近代文学研究の「学の自立」が言える出来事である。

日本近代文学館編『机上版 日本近代文学大事典』（昭和59年10月、講談社）がある。一分冊であるが、ポイント（活字の）が小さい。

19 昭和54年に、監修 津田青楓・夏目純一『夏目漱石遺墨集』全六巻（求龍堂）が、刊行される。

『夏目漱石遺墨集 第一巻』書蹟篇（昭和54年5月）。

『夏目漱石遺墨集 第二巻』書蹟篇（昭和54年11月）。

『夏目漱石遺墨集 第三卷』 絵画篇 (昭和54年7月)。  
 『夏目漱石遺墨集 第四卷』 絵画篇 (昭和55年1月)。  
 『夏目漱石遺墨集 第五卷』 書簡篇 (昭和54年9月)。  
 『夏目漱石遺墨集 第六卷』 書簡篇 (昭和55年3月)。  
 一卷¥20,000の、大部な『遺墨集』である。印刷も鮮明である。

小説、漢詩、俳句、英詩、文学論、評論、講演、絵画、書蹟、書簡、日記・断片、すべてが漱石文学のテキストである。「書蹟」「絵画」「書簡」と、小説以外の漱石の芸術表現様式の総体と、向き合うことが可能となる。

(未完)

\*昭和64年(1989年) 1月7日、天皇崩御(86歳)。「平成」と改元される。

附記 来年(平成28年・2016年)は、漱石没後、100年になる。

せめて昭和の終わりまでは記載の予定であったが、枚数と時間が尽きた。昭和54年で終わってしまった。

昭和の最後10年は、書いていない。だから現在まで、あと40年間がある。100分の60の報告である。

昭和の最後10年と平成年間(現代)には、近代文学の研究は、未曾有の「うねり」が、渦巻いている。都市論、「こゝろ」論争、テキスト論、フェミニズム論、ジェン

ダー論、語り論、読者論、文化記号論など々々(―必ずしも生成はこの順番ではなく、前後し並列しながら)、「現代」の学の様相には、目を見張られる。現在、近代文学の研究は、大きく「変容」した。

書名は、「近代化と学問」である。その意味でも、「日本近代文学」に関する、「近代」の学(漱石研究)の歴史の確認である。「現代」の学の歴史には、触れてない。

最後に、私の好きな言葉を、引用する。

伝統とは惰性ではない。畸形化の部分の多い制度や様式ではもちろんない。あらゆる時代において新鮮であろうとする努力であり、その不断の累積である。あるいは時代を挑発する力なのだ。

(増田正造『能の表現』、中公新書)

故きを温ねて、新しきを知ると言う。近代文学の研究者には、殊に漱石研究の専門家には、新しいことは何も書いていない。その意味では、漱石研究の考古学でもあるが、その旧態依然の中に、「時代を挑発する力」が、「伝統の継承」が、認識出来ればと思う。

昭和の出来事(\*アステリスク行)を、「時代軸」の指標として、入れた。

引用文に於いては、旧漢字は、新漢字に改めたところがある。